

# フォーラム NO. 7

(購読料 2000円/年)

## 原子力行政を問い直す宗教者の会

事務局 茨城県那珂郡東海村石神外宿1047

藤井 学昭 (TEL&FAX 029-282-8515)

編集 兵庫県篠山市中野155-6

長田 浩昭 (TEL&FAX 0795-94-2740)

振込口座 01080-4-82673

原子力行政を問い直す宗教者の会

発行 2001, 4, 30

<http://web.kyoto-inet.or.jp/people/stopnnp/>

E-mail [stopnnp@mbox.kyoto-inet.or.jp](mailto:stopnnp@mbox.kyoto-inet.or.jp)

### 出版予告 宗教者の会の本が出版社から発売されます！

原子力行政を問い直す宗教者の会編 出版 風媒社

### 『ヒバク—いのちの危機』 (仮題)

はじめに『何故、反原発なのか』／総ヒバクシャ化の足音／ルポ・現地を歩く  
／座談会・科学者、医師、宗教者からの提言／20世紀の課題と21世紀への歩み

発行予定 8月中

(四六版 300ページ)

予定価格 2500円

予約受付中 詳細はあとがきにあります！

# 報告

第六回全国集会 「長崎集会」

テーマ

「ヒバク—原爆被爆、原発労働・住民被曝—」

長崎集会代表 鶴谷忠男（日本キリスト教団 有田教会牧師）

今回の全国集会を「長崎」で開くことを参加者一同どんなにか期待されたことでありましょう。しかし、現地世話人は大きな不安の中にあって当日を迎えたことでした。一番の不安は、参加者がどのくらい来ていただけるのかということでした。幸い、50名の募集をいただけたことにスタッフ一同心から感謝したことです。ただ、長崎県周辺の参加者への呼びかけが不十分で地元の参加者が少数だったことは残念でした。

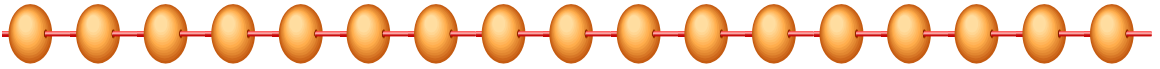
一日目の村田三郎医師の講演により、今回のテーマ「ヒバク」が、原爆被爆も、原発労働者被曝も、東海村JCOによる住民被曝も、事例やデータによって詳しく示され、これらが同一線上にあることが明確にされました。このデータ等は貴重なもので大切にしたいと思います。

更に今回は、長崎の町をフィールドワークしたことです。雨の中でしたが、長崎県部落史研究所の阿南重幸さんにご同行願ひ、関連する各史跡を説明していただきました。その中で、真宗大谷派長崎教務所において、「非核非戦」の碑が建てられてあり、今も数万人分の原爆犠牲者の遺骨が保管されていたことは大きな衝撃でした。

この集まりのために有力な講師をお迎えして、しかも熱心に御講演いただいたことは、参加者一同の大きな励みであり、感謝にたえないところであります。また、参加者の方々は遠路長崎までお集まりいただき、しかもかなりのハードスケジュールをこなしていただいたこと、大変お疲れさまでした。集会代表として心から感謝いたします。

「長崎集会」会場風景





## 深沢 奨（日本キリスト教団 佐世保教会牧師）

### 「こころ・くらし・からだ」の補償を

集会はその基調報告とも言うべき阪南中央病院の村田三郎医師による講演から始まった。村田医師はまさに集会が問おうとしていたことを医者という立場で担い続けてきた。阪南中央病院で彼は被爆40周年を機に原爆被爆者生活・健康・労働実態調査を行い、特に彼は、朝鮮人被爆者の実態に差別構造を見いだした。後に彼は原発労働者の生活・健康・労働実態の綿密な調査を始めるが、そこで原発労働者に原爆被爆者と類似した症状と共に、同様の差別構造を見いだす。村田医師はJCO臨界事故直後の東海村にも再三手弁当で駆けつけて不安におびえる住民の診断にあたった。科技庁や御用科学者たちは被爆線量と危険性を過小評価し、根拠のない「安全宣言」を繰り返したが、住民の不安は消えはしない。反対に村田医師が率直に危険性と健康への影響の可能性を告げることで、むしろ住民は落ち着いて事態を把握し、現実と課題を担い始める。このことは私たち宗教者に強く反省を促すだろう。私たちは現実を無視した安価な救いや恵みを「安全宣言」のように繰り返していないかと。

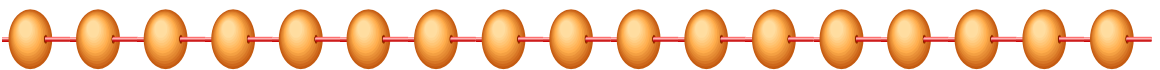
村田医師はこれらの活動を通して、切り捨てられ差別される原爆・原発被害者に「こころ・くらし・からだ」の補償を！と訴える。医師が「からだ」だけでなく「くらし」や「こころ」までも取り戻そうと悪戦苦闘する姿に私は鉄槌をくろう思いであった。宗教者は「こころ」だけを扱えばいいなどとどうして言えようか。

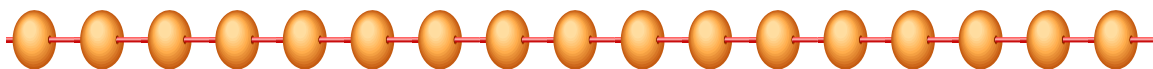
### 市民宗教者として

すべての発題を取り上げるには紙面が足りない。全体を通して問われたことをまとめたい。

#### ① 差別としての原発

戦時国策の帰結としての原爆にその差別性が露骨に表れていたように、現代の国策としての原子力行政にも同質の差別性が露見している。差別される辺境。差別され放射能に殺される現地市民と下請け労働者。イエスは差別された辺境ガリラヤで差別された民衆と共に生き、そのただ中で「神の国」を宣言し





た。私たちは今日、その足跡をたどる用意があるだろうか。

## ② 希望、しかし厳然たる危機

藤田祐幸さんは、数年後に迫った電力の完全自由化が、各電力会社にコストとリスクがあまりにも膨大な原子力発電からの撤退を余儀なくさせると言う。確かに撤退の足音はすでに聞こえてきている。しかし楽観は許されないと彼は釘を刺す。運転は止まっても、放射能の固まりと化した原子炉はその後数十年、核廃棄物に至っては数万年もの間厳重に管理されなければならない。斜陽化し、利益を生み出さないお荷物となった原子炉や核廃棄物の管理はさらにずさんなものになり、危険はむしろ増大しかねない。自由化によって自動的にやってくる脱原発は、本当の希望ではない。これ以上危険を辺境に押しつけず、どれだけ責任的に持続的にツケを担っていけるか。その担いきった先にこそ希望が見えてくるのだろう。

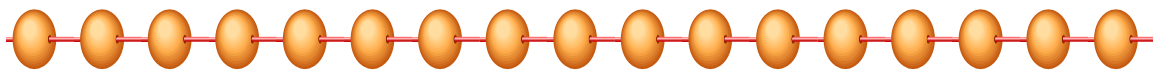
## ③ 市民宗教者として

「市民科学者」とはいわずと知れた高木仁三郎さんの言葉である。科学者として市民であることに違いはない。しかしあえてそう言わざるを得ないほど、多くの科学者は専門領域に引きこもり、それだけならまだしも権力や利権集団の片棒を担いできた。殊に核化学の分野においては顕著である。高木さんは自らの反省からこの言葉を唱え始めたのであった。そして今回の集会の講師たちもまた、まさに「市民科学者」であった。

彼らの言葉を聞きながら「宗教者」たる自らを思った。特にキリスト教はローマ国教化以来権力の片棒を担ぎ続けてきた。戦争や南北の収奪構造に荷担してきた。そしてその反省もそこそこに、教会を「専門領域」にして引きこもる。そのように振り返るとき、私は「市民科学者」たちに触発されて「市民宗教者」として生きることへと促される。



講演 村田三郎 阪南中央病院医師



## 蓮原耕児（久留米市・真宗大谷派正蓮寺住職）

### 二日目の報告と感想

午前中のフィールドワークは、「長崎は今日も雨だった」の如く、真冬の冷たい雨に打たれながら、56年前の原爆と被爆、とりわけ約三万人といわれる強制連行された朝鮮人被爆についての学びであった。その実態と現在までの歴史については、既に『フォーラムNO6』に深澤奨さんが述べておられるので割愛させていただく。とにかく上り坂と下り坂の繰り返しに加えての雨で、少々ハードなフィールドワークであった。

午後からの『証言』では、先ず、福岡の原発労働被曝者の川口義啓さんが、福井県の大飯原発での被曝労働の体験を語られた。初め鍛冶工の仕事ということであったのに、実際にはタンクの足場組みやタンクの中の清掃であったこと。そのタンクは原子炉を止めて一週間経っているのに熱風が吹き荒れていたこと。錆びた配管を鉛の板で覆う作業をした時は、アラームが鳴りっぱなし（※雇用されて十日程の間に受けさせられた安全教育では、アラーム・メーターが鳴ったら、直ちにそこを離れなさいと教えられていた）であったにもかかわらず作業をさせられたこと。そして最後は、ある部屋の配管の撤去作業をしていた時、作業チーム・リーダーが間違えて違う配管を切断しかけて、中から吹き出した生温い水を顔に浴びてしまったこと。その時、水のかからなかった下着を放射線量が高いからと廃棄処分させられたこと。その二、三日後から体調が悪くなり、半年後から、髪の毛もべつとりと枕に付くようになり、わずか数カ月で歯が13本抜け落ちてしまったこと。その後、次々と病気に罹り、生死をさまざめたことを話されました。さらに今も病気と不安を抱え「働きたいの働くことも出来ず、生きる屍となって、一生を終えねばならないと思うと悔しくてならない。」と訴えられた。

藤田祐幸さんの話では、当時、大飯原発は、古くなった蒸気発生器の交換作業中であって、それに遭遇したのが川口さんであったと思うとのことであった。

続いて、『長崎朝鮮人被爆者協議会』の会長で、修学旅行生に当時の語りべをされている朴・奎さんが語られた。先ず朴さんは、日本には強制連行でなく子どもの時に来たこと。それから成長して長崎に来て、原爆が投下された時は、原爆中心地から3km離れた袋町（現公会堂付近）に居て、大きな建物の中で命拾いをしたことを話された。「あの時、朝鮮人二万人あまりが被爆し、一万人は跡形もなく消えてしまって骨も名もないんです。創氏改名によって皆日本人の名前に変えさせられていて、殺さ

れたあと、日本人か朝鮮人か解らないんです。」という朴さんの言葉は重い。当時の長崎は、三菱造船所をはじめとする多くの軍事工場、炭鉱に強制連行された多くの朝鮮人が居て、そして原爆によって殺され、被爆して「長崎は朝鮮人にとって地獄であった」と朴さんは言われる。そして、未だに被爆者への補償救済がきちんと成されてないことや、平和の為には、一番近い日本と朝鮮が国交正常化することを訴えられた。


三人目に東海村の『JCO被害者の会』の谷田部裕子さんがJCO事故の日のことなどを通して語られた。それによると事故後、国の発表では地域住民には50ミリシーベルトを越えた人はいないということで、最初の一回の健康診断だけで何もなされていない。しかし、阪南中央病院の村田先生方のチームの調査では、推定被曝線量は平均で国の発表の7倍の高さになっていて、この結果では越える方が何人も出ている。しかも、谷田部さんの回りには、体調不良や原因不明の湿疹で苦しんでいる人がいる。にもかかわらず、半年後に行なわれた「原子力産業年次大会」という会議で、医者や原子力安全委員会の人たちは、会場の質問に対して、きっぱりと「影響のある方は、あの亡くなられたお二方と、もう一人の三人だけです。あとの方は全く影響ありません。」といい、さらにその会場で配られた資料に、原爆による癌のリスクの増加とか、そういうものは現実に人が心配しているほどのものではないという風にかかれてたり、チェルノブイリの事故の影響ですら、そのリスクはないというような話が壇上でなされたという。これに対して原子力産業を推進している日本の「エリートであろう」科学者たちが、それを聞いて満場の拍手を送るという状況だったという。そしてその会の締め括りの言葉は「国民は知らないので怖がるから、リスクは少ない。少しの放射線だったら、むしろ身体に良いぐらいなんだから、知らない国民に、放射線利用のメリットとリスクの少なさと、これからの必要性とをこれからどんどん教育していかなければいけない……」と。こんなにも人を愚弄した恥ずかしい茶番を一体誰が信じるのだろうかと思うが、極めて下品で低俗なマンガを使い、日本やアジアの史実を嘘で塗り固め、皇国史観をもって良からぬことを企んでいる人たち「新しい歴史教科書をつくる会」になびく人たちもいるわけで、原子力という「死の産業」を無理やり推進する姿勢は、やはり恐ろしいと思う。

また最近の東海村の村議会で、初めて原子力に不安になっている一般住民を公募で



被曝労働の現実を証言された川口義啓さん



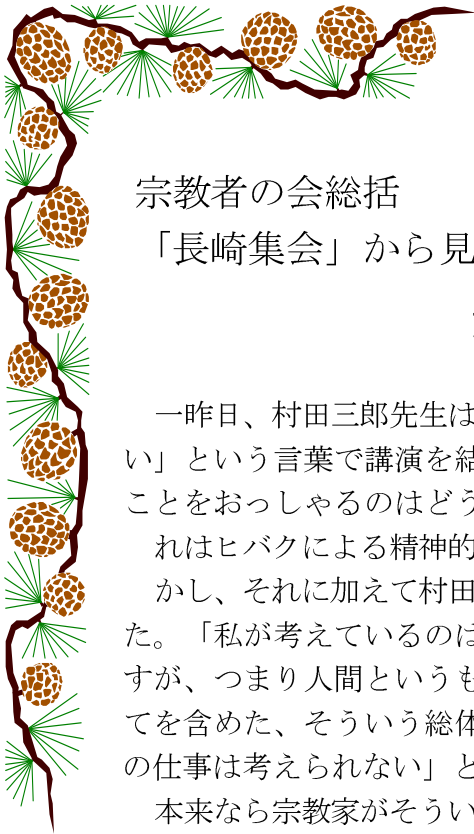


加え、審議会のようなもので立てた村の長期計画に「原発誘致の明記」がないと「脱原子力の流れが止まらなくなってしまう。原子力発祥の村が原子力に否定的な姿勢を見せたのでは、全国の原発立地市町村に波及する」と、動議が出され、賛成多数によって「原発誘致」を認めてしまった、とのこと。谷田部さんは「道は厳しいです。でもめげずに」と涙ながらに語られた。

続いての講義では藤田祐幸さんは、先ず、原爆の材料が原発や再処理工場によって出来ることの説明をされ、日本の原子力産業が電力を作るといって建設してきた全ての仕組みが完成したときには、日本は、世界で最も性能の良い核兵器を作るだけのプルトニウムを商業レベルで量産する体制ができること。核兵器産業と原子力産業というものは、実はシステムの上においては区別の付くものではないこと。日本の原子力産業と軍事産業を取り結んでいるものが三菱重工という企業であること。三菱という組織と、原子力産業の意志決定機関と、日本の防衛産業の中枢がつながっていて、日本の電力産業はエネルギー産業で電気を作るためにある産業だと思っていたら、どうやら違おうと。全体を支配している構図は三菱一族であることを話された。その上で今原発より、明らかに安く安全で発電効率もはるかに高い天然ガスが良いことは解っているのに、原発を推進する人たちは原子力を国策としてやろうとする。この構造の中に原子力と三菱と核兵器の問題が密接に絡んでいて、従って平和利用はOKで軍事利用はダメよというような二分法は現実世界でとっくに裏切られていると。市民運動がまだそれに気が付いてないと。

それでは原子力の問題とは何か。もうこれはエネルギー問題ではない放射能の問題だと。巨事故が起きたときどうなるか。事故を起こさずに運転されたとしても、日常的な被曝労働問題が存在する。さらに廃棄物問題がある。しかもこの三つの問題は全く解決不能であることを話されながら、平和利用ということで原発を容認した我々の責任を問われた。実際、広島原爆の1000倍の放射能を持った原発50基と周辺住民への苦悩を強めている現実があり、さらに1500トンの放射性廃棄物があり、我々は確実に加害の側にいると。そしてこれらは未来へ押し付けられる。だから21世紀は核の問題であり、核に手を付けることは絶対悪であると。

紙面の都合で後半を割愛して、後のパネルでの話を含めて一言。藤田さんが話されたように、三年後に、電力自由化によって、外国や日本の企業などによる天然ガス発電による電力事業参加によって、原子力依存の日本の電力事業が危機的状態になるのなら、脱原発のチャンス。それも私には大事故で全てを失う前のラスト・チャンスのように思えてならない。方途を探り、新たな運動を展開すべき時だと思った。



この文章は三日目の協議会の中で発表されたものに、加筆していただいたものです。(編集者)

## 宗教者の会総括

### 「長崎集会」から見えてきたもの

東海林 勤 (日本キリスト教団 稲城教会牧師)

一昨日、村田三郎先生は「心・暮らし・体の補償を求めていかねばならない」という言葉で講演を結ばれたんですね。私はお医者さんが「心」ということをおっしゃるのはどういう意味かなと思って質問しました。もちろんこれはヒバクによる精神的打撃の問題だと、狭い意味ではそうなんです。しかし、それに加えて村田さんは、「心というのは全体性です」とおっしゃった。「私が考えているのは全体性です」と。それで、「あっ」と思ったんですが、つまり人間というものを総体としてとらえる。精神性も身体性もすべてを含めた、そういう総体としてとらえることなしに、お医者さんが「自分の仕事は考えられない」ということをはっきりと出しておられる。

本来なら宗教家がそういうことをキチッととらえて、現代に提示すべき問題だと思うんです。「心」ということでは、「個別性」とか「関係性」とか、そういう広がりもキチッととらえる必要がある、「全体性」という言葉だけでは言い尽くせない、もっと大きな深いものがあると思います。そういうものを本来は宗教者がキチッと現代において出すべきことなんです。しかし宗教者がそれをちゃんとやってないものだから、科学者・技術者・医療従事者が働けば働くほど人間のモノ化が起こって、それがどうにもならないところへきて、医療の荒廃がものすごい勢いで暴露されるような時代にきてしまった。それで本当にものを考えているお医者さんは、「心」ということを言わざるを得ないわけでしょう。

近代の宗教というものが科学技術と政治経済の領域から撤退してしまって、狭い意味の心の領域、内面的、私的な領域に撤退して、そういうことを支配者は喜んでいるわけです。つまり、内面的なことを語って民衆を手なづけてくれれば、支配者には都合がいいわけですね。宗教はそういう役割を果たし、支配者に気に入られるかたちで制度を保って、生き延びてきた。それを見ている中産階級・知識人が宗教を軽視するのは当たり前のことです。宗教というのは「迷信だ」とか、「自立できない弱い人間が神仏にすぎる」のだと見ますよね。これは日本が一番ひどいです。世界中探しても、宗教のこれほどの撤退と、宗教に対する低い評価。日本が一番ひどいと私は思います。ところが、低い評価をしている人たち自身が、もう行き詰まってしまっているんです。それでたとえば高木仁三郎さんが「アクティブ・テクノロジー」「アグレッシブ・テクノロジー」はもうダメだ、「パッシブ・テクノロジー」じゃなければダメ

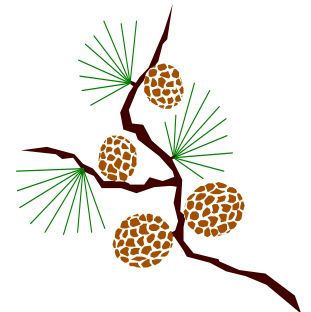


だということを言い出された。これは人間の傲慢という問題です。宗教はそういう問題をキチッと警告してこなかったけれど、科学者・技術者が一生懸命良心的にやっていると、人間の傲慢という問題に突き当たるということ、ああいうかたちで表現されたんですね。

我々はぼんやりしていたという反省を含めて、もう一度古代から何千年、いや何万年の人間の知を結集してきた宗教の宝というものにキチッと立ち返る必要がある。いたずらに「科学技術の問題は分かりません」とおどおどしてないで、その中に聞こえてくる現代の宗教に対する切実な要求に応えなければならない。我々が本来持っているはずの知恵にもう一度立ち返って、それを現代に通じる言葉で言わないといけない。しかし私たちは、言葉もできてないんです。聖書の専門用語とか、経典の言葉が現代にどういう意味を持つのかということの捉え直しができてないんですよ。だって、撤退してきたわけだから。問題にふれてこなかったから。けれども、その捉え直しをキチッとしていくなら、ものすごい知恵の力があると思うんです。昨日、藤田先生が話して下さったような現実、矢田部さん川口さんが話して下さった人間の現実。それに向き合うことによって、我々が現代、聖書なら聖書が言っている言葉が何を意味するかということ、捉えていきたい。

原発はその意味では、村田さんがおっしゃったような意味の人間の「心」あるいは「いのち」を真っ向から否定しているし、すべての生命を否定しているわけです。そういうことを、我々が自分の宗教の捉え直しをする中でつかんでいく。キリスト教の場合だったら、撤退することでスッポリ落としてきた、旧約聖書の預言者の叫び、あるいはイエスの処刑されるに至るあの歩みの意味。そういうようなものを昨日、一昨日我々が突きつけられた、社会的弱者の現実、立って捉え直したい。我々の会は始まった時から被曝者と住民の視点に立とうとしてきたわけですが、そういうことを本当に自分の宗教の理解によって捉えてははっきり表現していくということが、一番基本的な役目じゃないかと思えます。

我々クリスチャンは「近代キリスト教は自然に対してとんでもないことやってきたではないか」と言われると、それでもう、すくんでしまうんです。けれども古代の聖書はいいかげんなものではないはずなのです。古代人が自然を破壊して平気であるような、そんな感覚で生きていたはずはないと思ってよく読めば、自然に対する畏敬とか、愛情とか責任とかということは非常に豊かにあるんですね。そういうものを捉え直すと、キリスト教の中にあるギリシャ的な二元論の影響からどう脱していくか、それから近代科学技術の傲慢さというものをどうやって脱していくかということがキリスト教の課題としてはっきり分かると思う。そういうことをやりながら教会に訴え、社会に対しても社会に通じる言葉でそのことを謙虚にですけども提示していくということが、我々の役目じゃないのかなという気がするんです。



## あとがき

★風媒社出版『ヒバク—いのちの危機』原子力行政を問い直す宗教者の会編の本の予約申し込みをお願いします。予約は同封の葉書、もしくは工藤美彌子までFAX（075-751-5045）でお願いします。定価2500円は、あくまでも予定価格ですので、ご了解下さい。

内容は、藤井氏の東海村からの報告と被曝労働の実態を含めた、この国のヒバクの現実を中心に、藤田祐幸、村田三郎各氏と当会から中島・松岡・長田が加わった座談会、六ヶ所に関わる岩田氏をはじめ各地のメンバーの生き様のルポ、梅森氏による宗教者の会の歩みの総括、東海林氏をはじめとした宗教者の会のメンバーからの提言と、内容は非常に豊かなものに仕上がっています。

この出版は、宗教者の会が300部を引き受けることになると思います。出版後の初期の段階で200部ぐらいをさばけないと、会計と在庫の置き場所で大変な事態となります。どうか、1冊といわず、周りの方々へも予約のお願いをしていただけませんか。

★長崎集會に参加された皆様、また資金カンパ下さった方々、ありがとうございました。集會の案内発送が遅れ、参加できなかった方が多数おられたこと、申し訳なく思っております。内容としては、非常に充実していたという声をいただいております。事務局では、集會の講演録（風媒社出版の本とは別に）の作成を、次の世話人会で提案する予定で準備をすすめています。

★5月末に世話人会を予定しています。長崎集會を終えての、今後の展開を模索しなければなりません。世話人の方々には、後ほどご案内を送らせていただきます。よろしく願いいたします。（長田）

## ★ご入金いただき、ありがとうございました！（事務局）（敬称略）

碧海宏 戸枝義明 芳井伸明 藤場俊基 樋口洋一 豊田等流 担保哲夫・立子 森山重子 中村信 小宮一雄 本間義悦 山崎喜美子 海法龍 和田英昭 北村芳子 境昭英 雲英真人 前田義朗 大橋一雄 白木澤隆博 高山忠士 比後孝 大城龍昭 金石晃陽 細川憲了 大野隆昭 一色孝 高坂制立 藤井清子 藤川香巖 名古成朋 竹田雅文 橋本正博 今泉温資 武井滉 奉康昭 二階堂行寿 金山哲哉 藤森巍 上杉俊 高橋法信 佐野俊正 酒井正夫 本多香織 鈴木しもん 篠田穰 阿良田豊司 安斎育郎 中村俊道 菊池正人 黒澤和順 高木和美 入江宥道 森本宥紹・みつ子 周藤饒 久万寿俊雄 平松正信 安本和正 阿部千鶴子 小谷麗子 高木元? 加藤順教 菅野真治 保倉謙雄 大石與賜子 小笠原公子 尾畑文正 稲葉和世 松島勢至 垂水正和 安田和人 山本繁樹 松田佳子 山本久子 山口寿明 有川宏 清水恒子 今井隆信 岡山巧 安田治夫 三好鉄雄 齊藤喜子 くまっぼとバンビっぼ 大船修道院 岸田正博 中谷昌善 橋本陽子 梅田順子 渡辺智子 輿水正人 カトリック八幡町教会 金石潤導 戸次公正 久保山教善 山口裕子 大沼善龍 菊地真一 井上正 齊藤美智子 小野良世 佐々木徹 浅井正美 嶋橋美智子 寺島元 大橋寛信 山本爽起子 玉光順正 古橋和可子 京都洛陽教会青年部 和田至鉦 梅田環 塚本真如 井上明美 荒川広司 佐世保教会 亀井廣道